

東ティモールと日本

週のはじめに考える

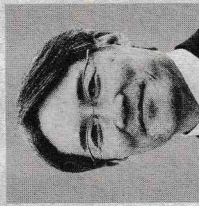
世の中には「良い戦争」と「悪い戦争」があるといわれる。米国のイラク侵攻は正義であり善で、ロシアのウクライナ侵攻は侵略であり悪とされ、前者には日本も自衛隊を派兵した。ただし、日本では悲惨な歴史体験をもとに「戦争は絶対悪」という共通の思いを、憲法の戦争放棄規定とともに維持してきている。

このベースになっている「体験」は、さまざまな形態のメディアによって共有化され、世代を超えて伝えられることで、国民間の「緩やかな合意」と形を多存在している。その方法として、戦争遺跡や博物館、資料館といった伝承機能を持った社会施設とともに、新聞をはじめテレビ、ラジオ、出版物などによって、社会全体での情報共有を可能とし、知識の定着と継承を促進する動きが機能してきたことも大きい。

しかし、戦争を知らない政治家、財界人が多数を占める中、徐々に「戦争は必要悪」とする考えが広がり、戦力（軍）の保持は主権国家として当然との声が大きくなりつつある。同時にシャリナリズムの究極の目的とされる「戦争をさせないこと」も、時に現実的でないとして後者に追いやられがちになっている。

津波や原子力災害に関し、東北各県の被災地ではこの一二年で多くの震災遺構が整備され、伝承館が開館、さらに準備中のものも少なくない。一方で、十年を節目にして政府は追悼式典をやめ、新聞やテレビの報道も今年は大きく減少した。いまだに多くの行方不明者がいることも、自宅に帰れず避難を余儀なくされている人が多いことも、ほとんど知られないまま歴史的事実として年表上の出来事になっている。伝える側の報道機関内ですら、当時を知る

戦争をさせないこと



時代を 読む

専修大学教授
山田 健太

放送人、新聞人は減少を続け、被災地のある放送局の場合、報道関係者の半分以上は未体験者だといふ。

戦後の日本では「悪い原子力」と「良い原子力」があつて、原爆は前者で許されなければ、原発は後者で積極的に推進する政策がとられ、マスメディアもそれを強く後押ししてきた。しかし、福島事故はそうした色分けを見直す動きにつながった。その原動力は、原爆同様、原発事故の悲惨さと重い健康被害や社会的後遺症だ。たとえば常磐線が福島県に入ると、夜ノ森駅や大野駅の近くには背丈を超える鉄の門扉があつて、目の前の民家に近づくとできない状況が続いていた。

にもかかわらず、政治家や政党によって、ロシアへの経済制裁の結果としてのエネルギー不足を理由に原発再稼働の特例が求められたり、抑止力としての核武装の必要性が提言されたりしている。これらは、ヒロシマが風化しつつあることとともに、フクシマは社会全体での共有もままならないことの一側面だろう。

先の戦争を客観的な史実に基づき伝える施設は、国内に少ないばかりか、体験者がいなくなり世間の記憶が薄れるのを待つかのような状況すらある。教科書も政府の歴史観に反する記述を控える状況にある。戦争も震災も、遺構や資料を訪れた者への訴求力や想像力を呼び起す。しかし、そうした知識や感情を言語化することでより広め定着させ、社会全体で継承していくには点を面にしていく作業が必要で、これはシャリナリズムの役割だ。

3・11を国内のみならず世界に向け伝え続け、共有化する行為や姿勢そのものが、戦争をさせないことにつながっていく。

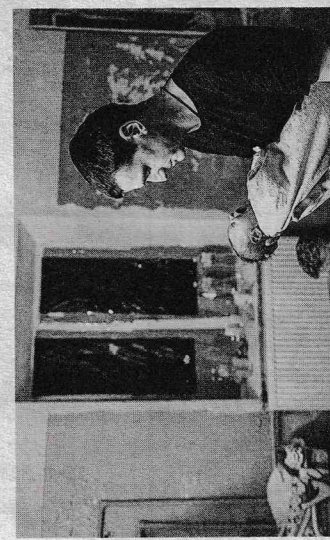
2022.3.20

昨夏の発言欄テーマ投稿「戦後76年 平和をつなぐ」。98歳の元学徒兵男性が「戦争のないうちが世界を人類はつくろってやる義務がある」と訴えました。その男性は投稿掲載3日前に亡くなり、紙面を見ることができませんでした。記事はQRコードからそれかわらず7カ月。世界はその男性が



ロシアのウクライナへの軍で亡くなった子どもは百人を数えた。ウクライナ検察当局の調査によると、国連難民高等弁務官事務所に登録されたウクライナ難民は三百万人を上回ったと推定されている。うち半数が子どもです。

「パパ、ママ、どこに」。朝刊では、避難先のポーランドにクワンザに残る親の安全を祈るもたちの姿を朝日新聞記者が撮影しました。日常を奪われ、から泣きだす子も増えています。



2日、キエフの産科病院地下室で赤ちゃんを抱き上げる父親（E.P.）の姿（4日の写真特集面から再掲）

す。一九九
立派が78.
独立を宣言
最近には
立運動で
一作りの